

食べられなくなったらどうしますか？  
認知症のターミナルケアを考える

# 看護師対象調査報告

諏訪さゆり

日本老年看護学会理事

千葉大学大学院看護学研究科

訪問看護学教育研究分野

# 調査の名称

「認知症末期患者に対する  
人工的栄養・水分補給法の施行実態と  
その関連要因に関する調査」

日本老年看護学会看護師会員対象

# 調査の目的

- ・ 摂食困難となった認知症末期患者のANHの導入や経口摂取再開に関して、看護師としての経験の有無や判断の根拠を明らかにすること
- ・ 認知症患者への食事と口腔ケアに関するチームケアの状況を明らかにすること
- ・ 認知症末期患者のANHに関する看護学における基礎教育の状況を明らかにすること
- ・ 認知症末期で経口摂取困難な患者のシナリオを示し、ANHの施行や差し控えに関する問題意識や、倫理・法律問題に対する意識を探索すること

## ➤ 対象

日本老年看護学会看護師会員(n=1,104)

## ➤ 方法

郵送無記名自記式質問紙調査

➤ 調査時期 2010年12月

## ➤ 調査内容

臨床・教育での実践

家族としての経験

意識(シナリオケースについての判断)

\*シナリオ2種 (対象者を2群に)

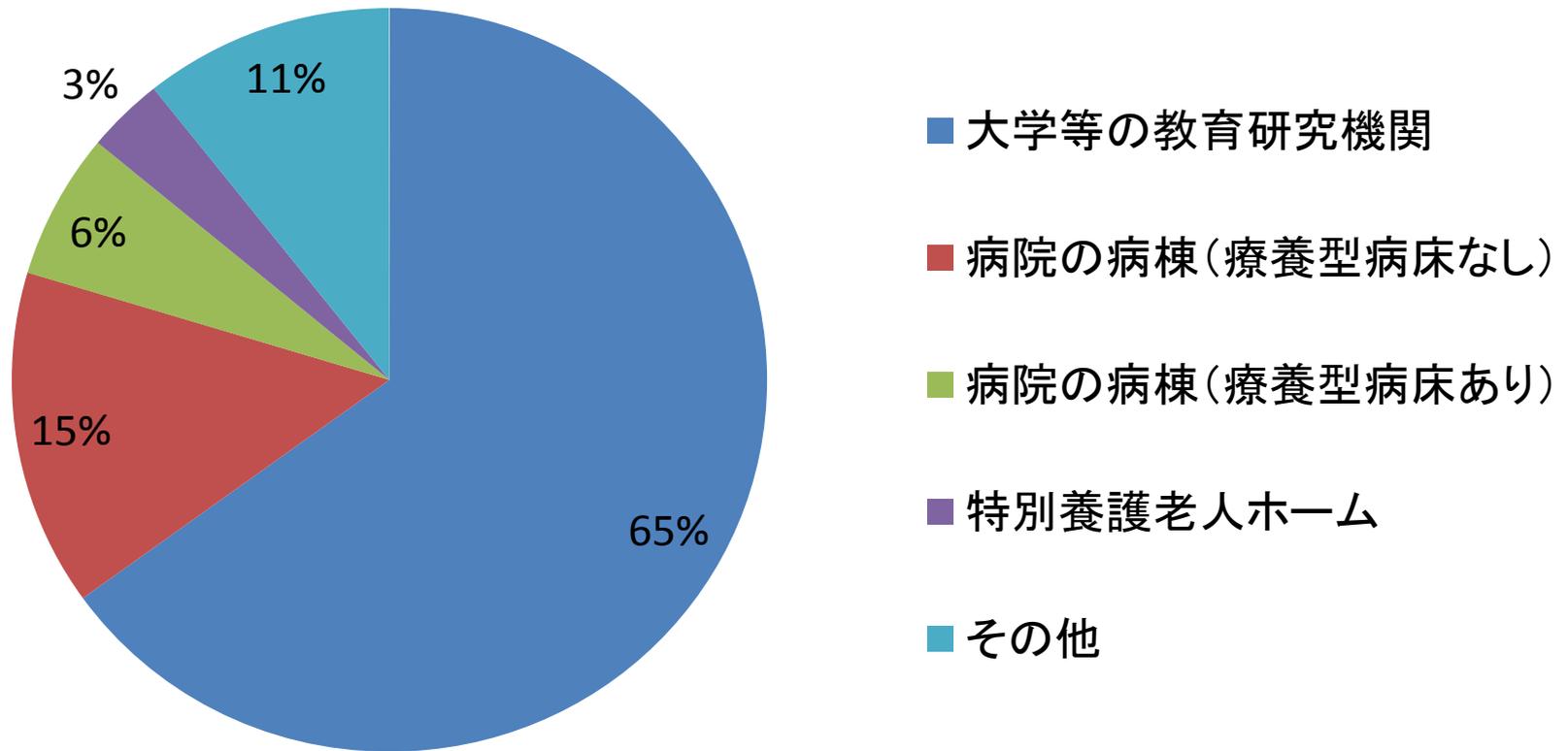
## 【結果】

- 分析対象： 363票 （有効回答率：32.8%）
- 回答者男女比： 2.5%：96.4%
- 回答者平均年齢： 45.6歳±9.7
- 回答者平均臨床経験年数： 12.4年±8.1

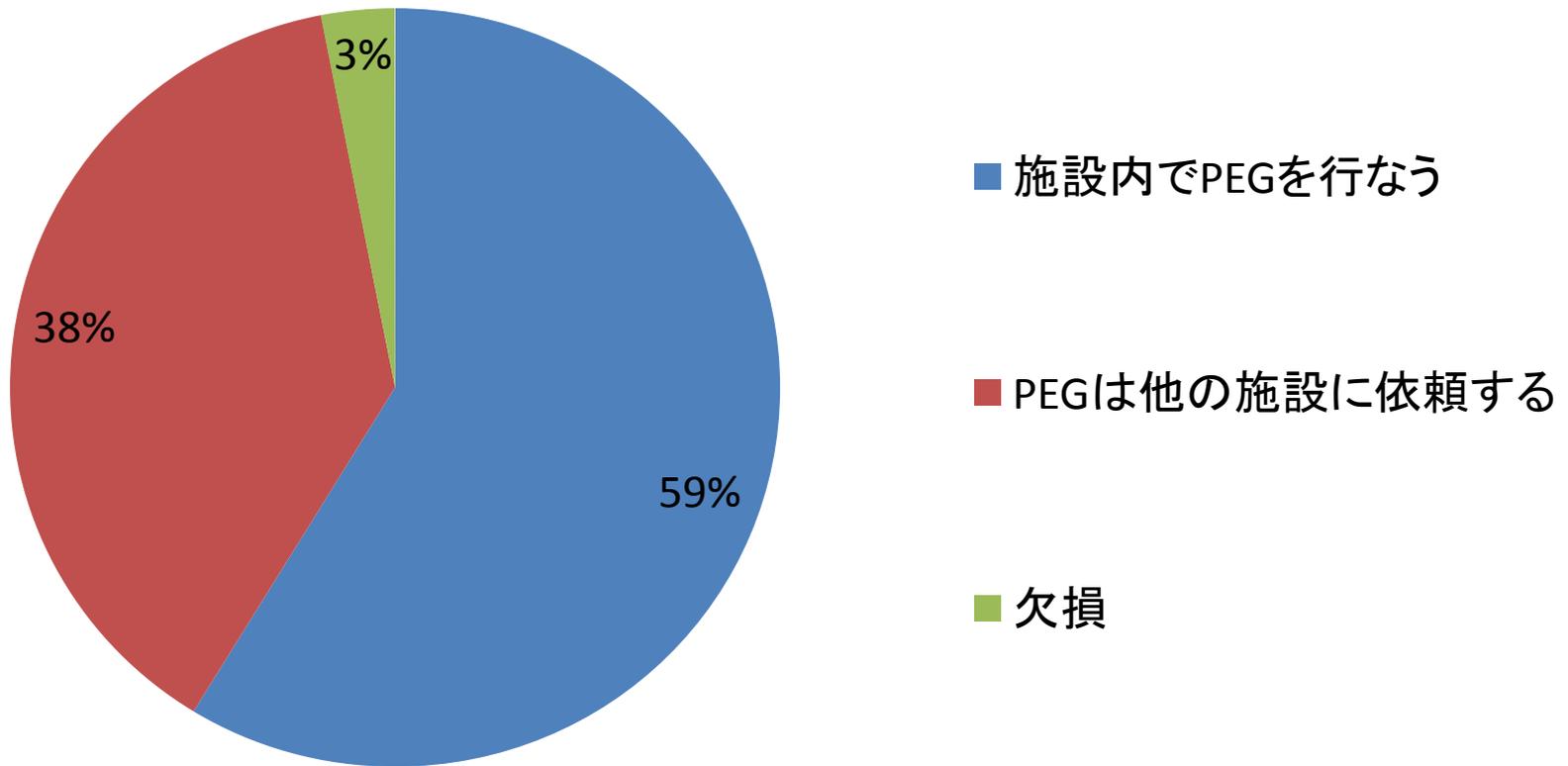
## 【用語の定義】

- 胃瘻栄養法は経皮内視鏡的胃瘻造設術(PEG)によって胃瘻をつくる方法を指し、開腹術によって胃瘻造設する場合を含まない。
- 認知症末期を「認知症が進行し、意思疎通困難、寝たきり、摂食嚥下困難であり、可能な最善の治療によっても病状の好転や進行の阻止が期待できなくなり、死にいたるプロセスを考慮に入れて臨床上の意思決定を行う状態」と定義。
- 人工的な栄養・水分補給法をANH(artificial nutrition and hydration)と略す。ANHには、静脈栄養法と経腸栄養法のすべてを含む。

# 現在の所属機関

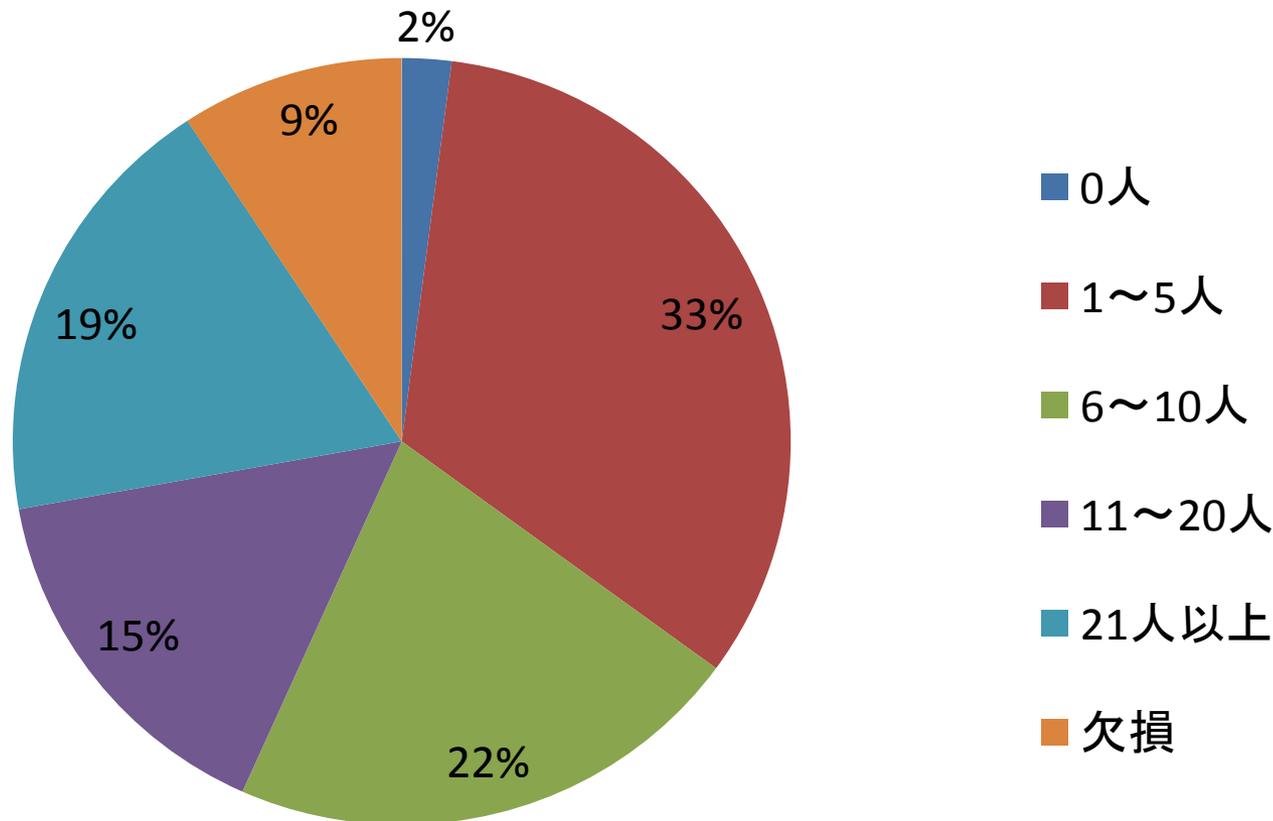


# PEGを施行する場合の原則的な対応



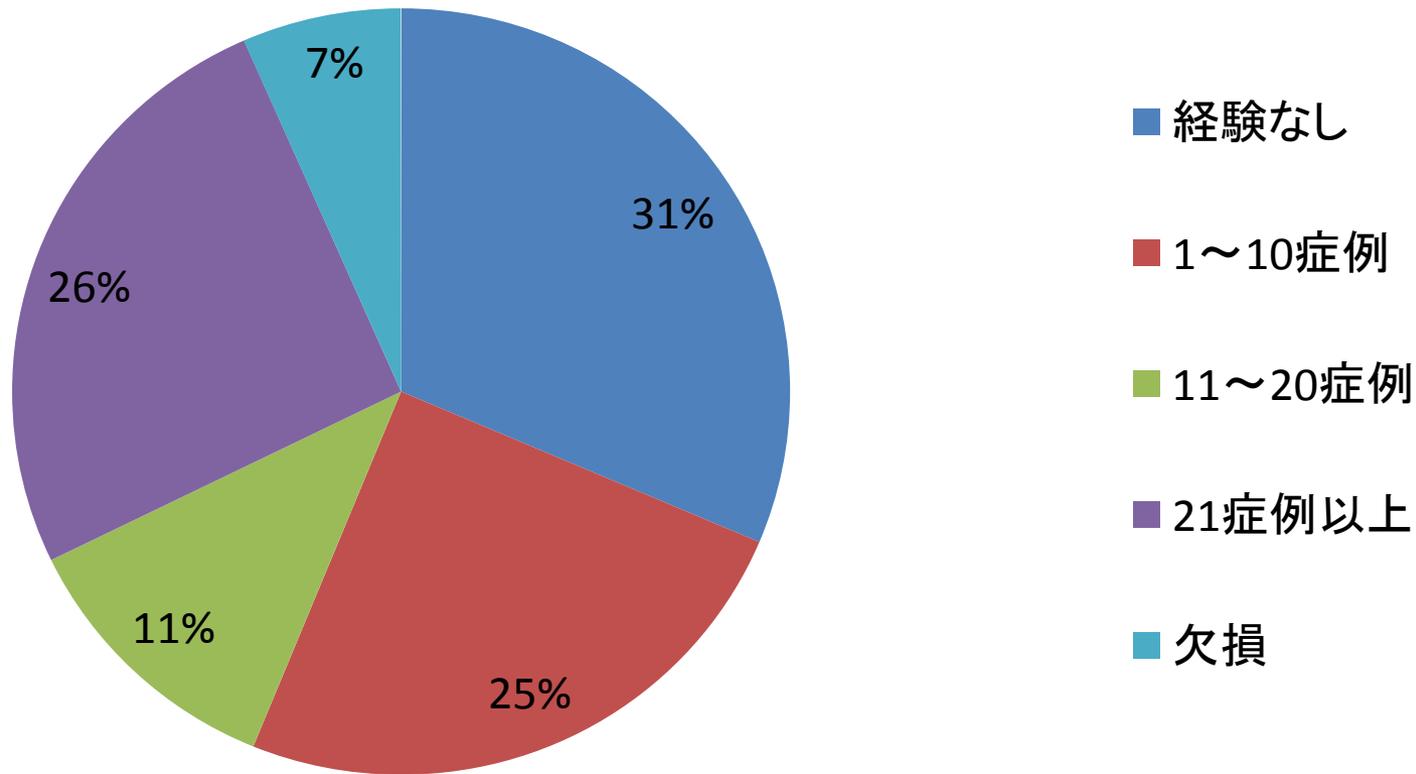
病院の病棟などに勤務する対象者 複数回答 N = 97

# 過去1年間に誤嚥性肺炎に罹患した患者の延べ人数

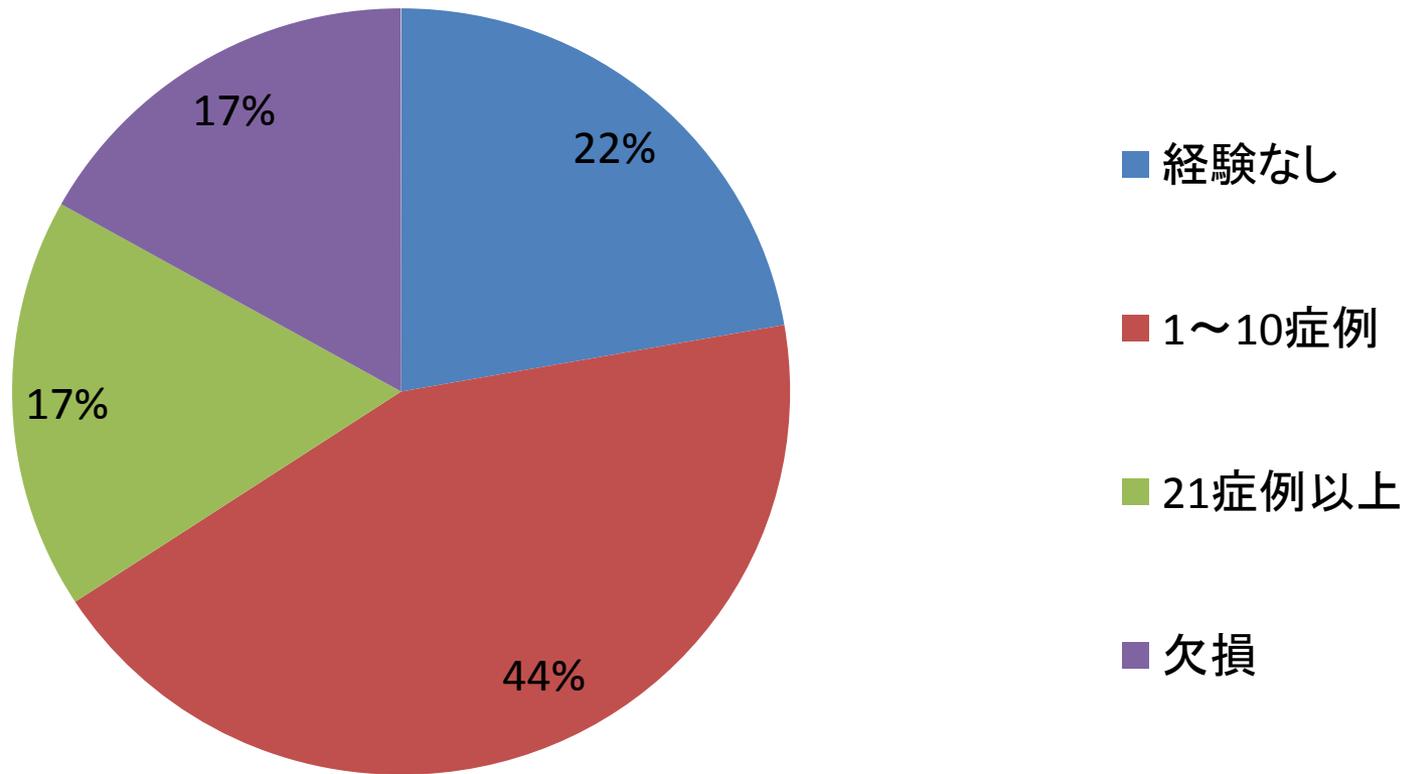


病院の病棟などに勤務する対象者 複数回答 N = 97

# 認知症末期患者の看護師としての 看護経験

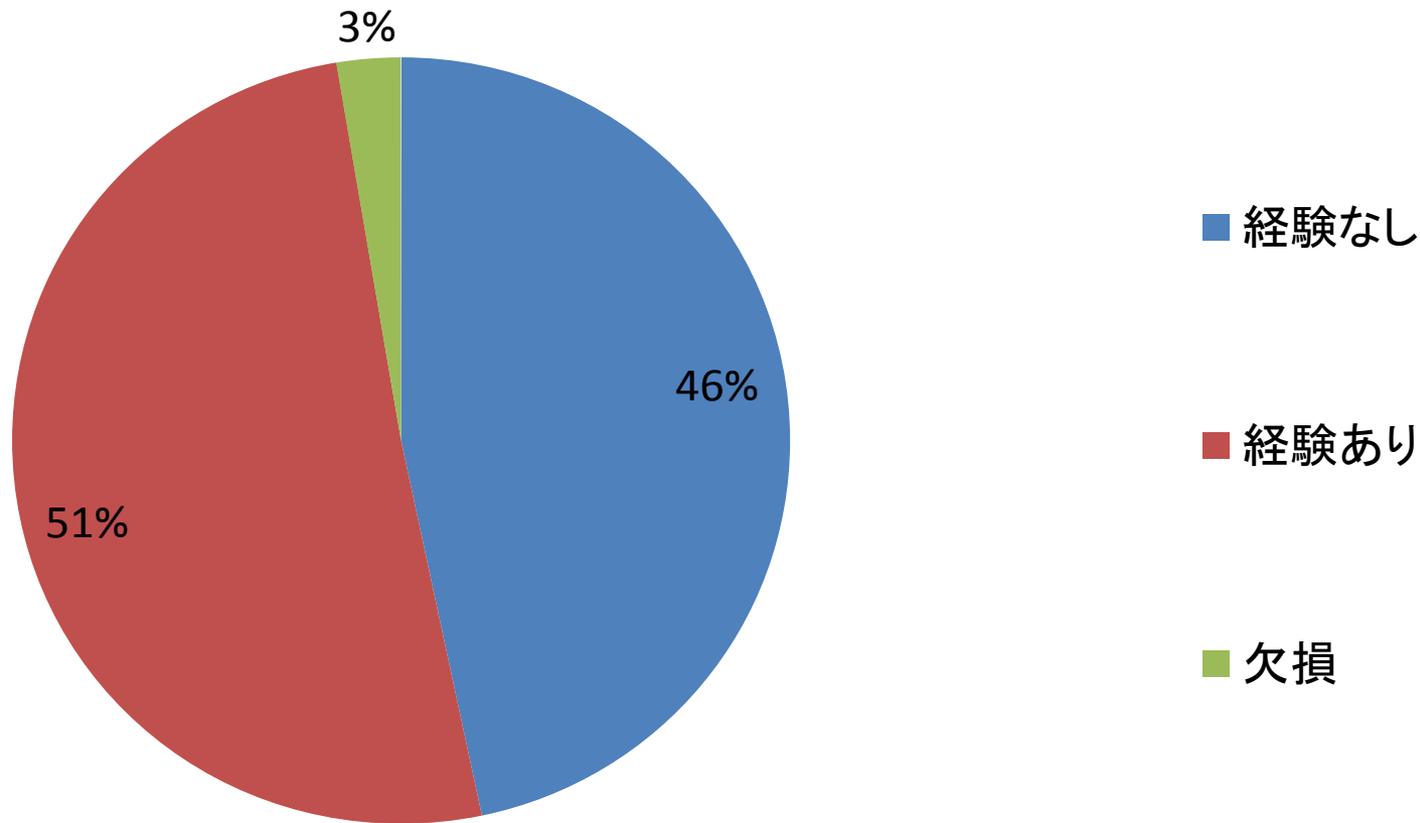


# 認知症末期患者の ANH導入についての意思決定に 看護師として関わった経験



認知症末期患者を看護師として看護した経験のある対象者 N = 225

# 認知症末期患者で摂食困難となったが ANHを導入しない選択の経験



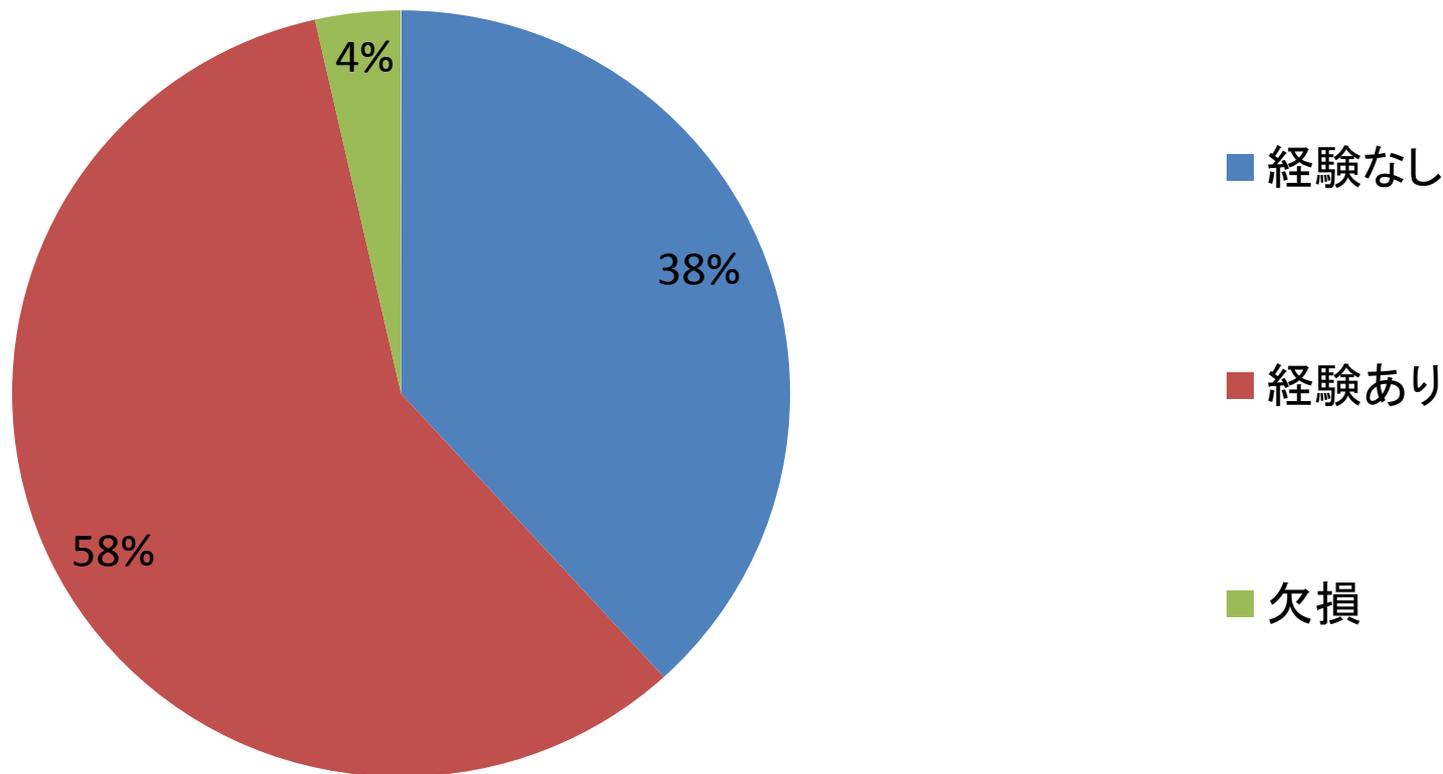
認知症末期患者を看護師として看護した経験のある対象者 N = 225

# ANHを導入しない選択の経験の具体

## 自由記述から

- 本人が意思疎通可能だった頃から食べることを嫌がり、点滴や経管栄養を施行しても自己抜去していたという理由から、ご家族が無理にANHを導入することはしたくないと意思決定しました
- 経口から食べたい意志（口の中に手を入れる、シーツを食べている）がみられたため
- 経口摂取できる事が自然であり、それができなくなるということは寿命と考え、人工的な栄養や水分補給を拒否されたというケースが何件かありました
- 口から食べさせたいという家族の強い希望があった

# 認知症末期患者で摂食困難となり、ANH導入後、 経口摂取できるようになりANHを使用しなくなった ケースの経験

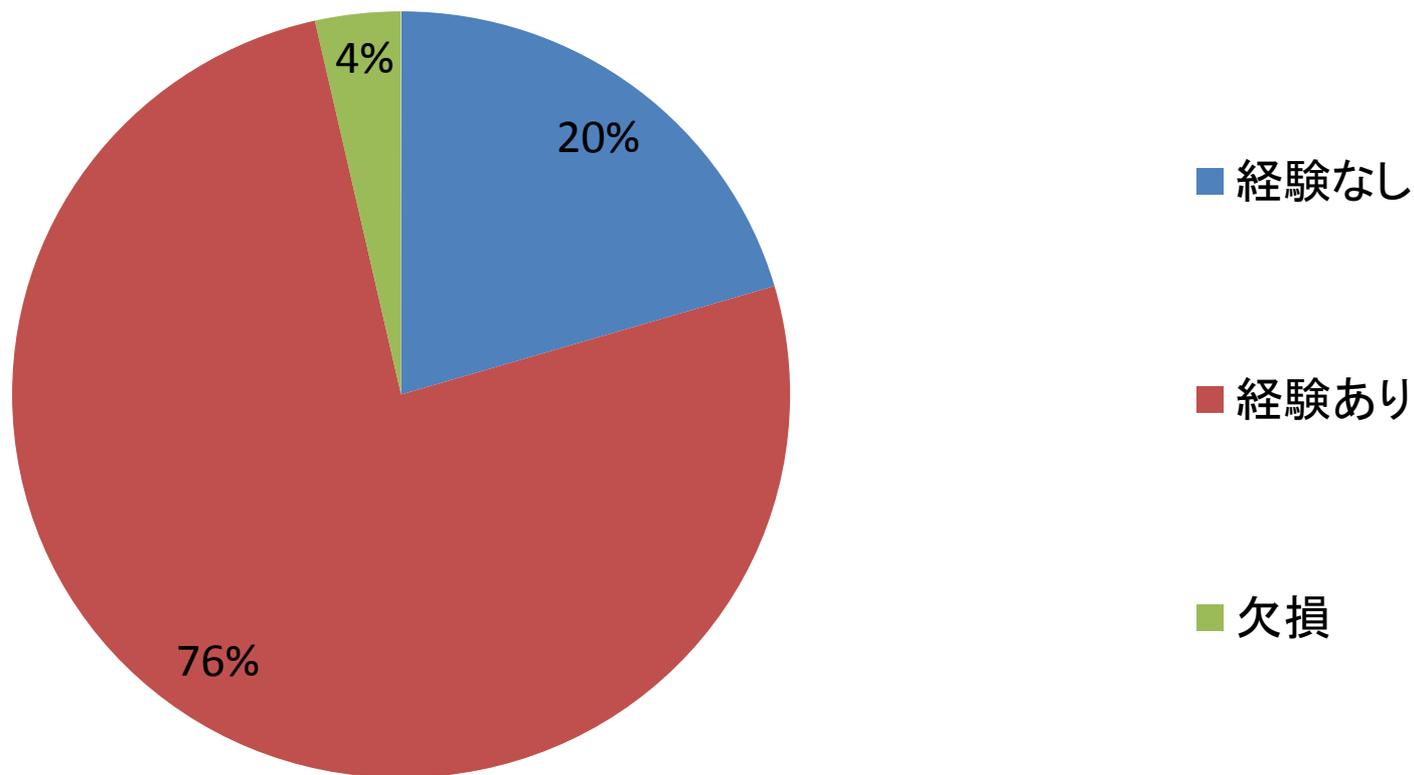


認知症末期患者を看護師として看護した経験のある対象者 N = 225

# ANH導入後、経口摂取できるようになり ANHを使用しなくなったケースの具体

- 甘いものを食べたがり、“あめあめ”といっているようだった。自分の指をなめたりした。チョコレートを食べて特に問題が無かった
- 意識レベルが改善し、会話や嚥下ができるようになった
- 患者本人に表情が出てきて、リクライニングチェアに90分以上座れ、唾液をのみ込み、うなずきだけの返事ではあるが食べる意欲を示した。また、家族もリスクも含め、食べさせてあげたいと同意が得られた
- 意識の改善や唾液を嚥下できる、口を動かせるなど口腔内が整った。また、本人の「食べたい」という発言や思いがみられたため
- 退院後家族が熱心に経口摂取(ペースト状の食事)を支えた
- 継続的な歯ブラシによる口腔ケア
- 本人の好きなものをムース状にして提供した。1回もしくは1日食べられなくても、根気よく対応した。口腔嚥下体操及び口腔ケアを歯科医と連携しながら実施した

# ANHを導入後にANHを中止し、経口摂取も積極的に進めなかったケースの経験

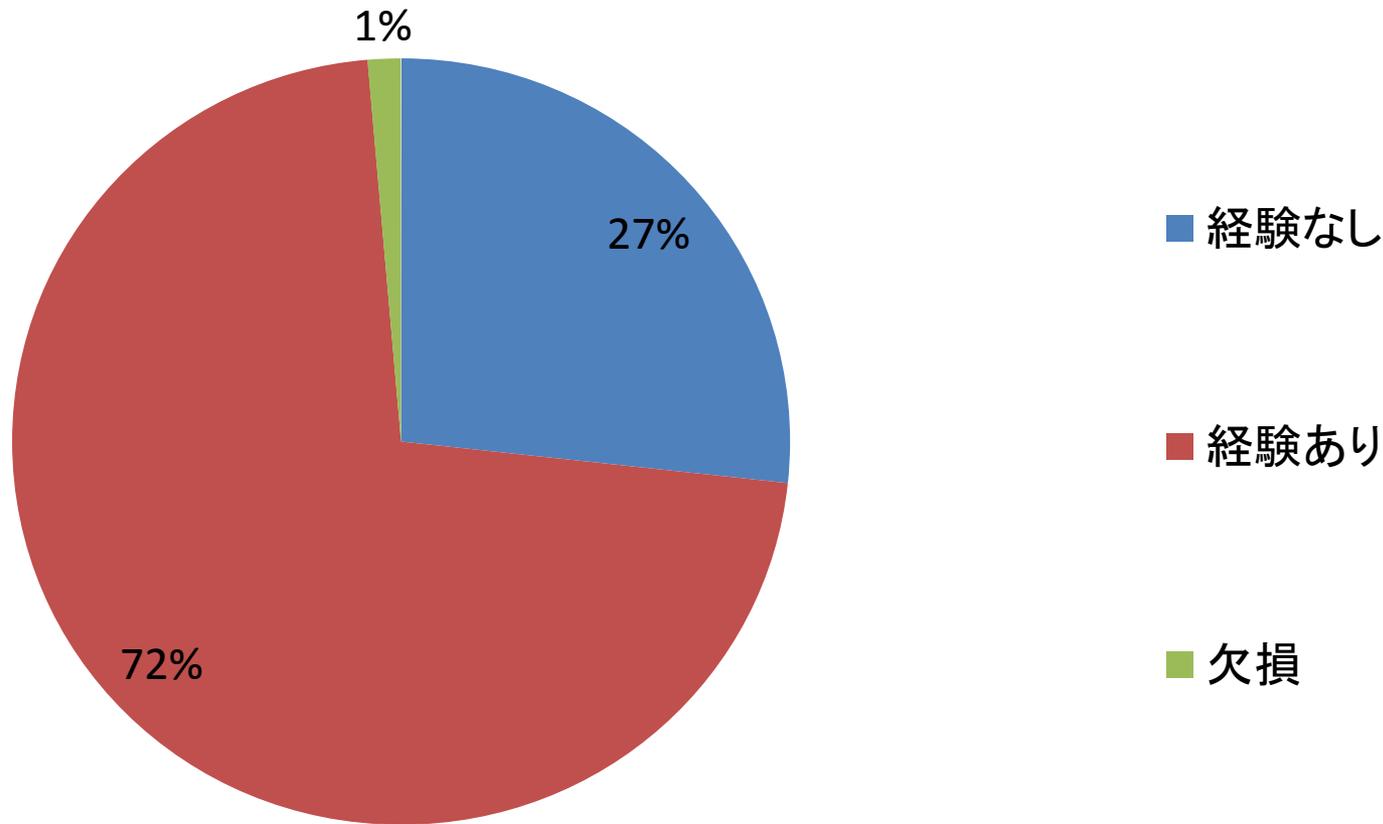


認知症末期患者を看護師として看護した経験のある対象者 N = 225

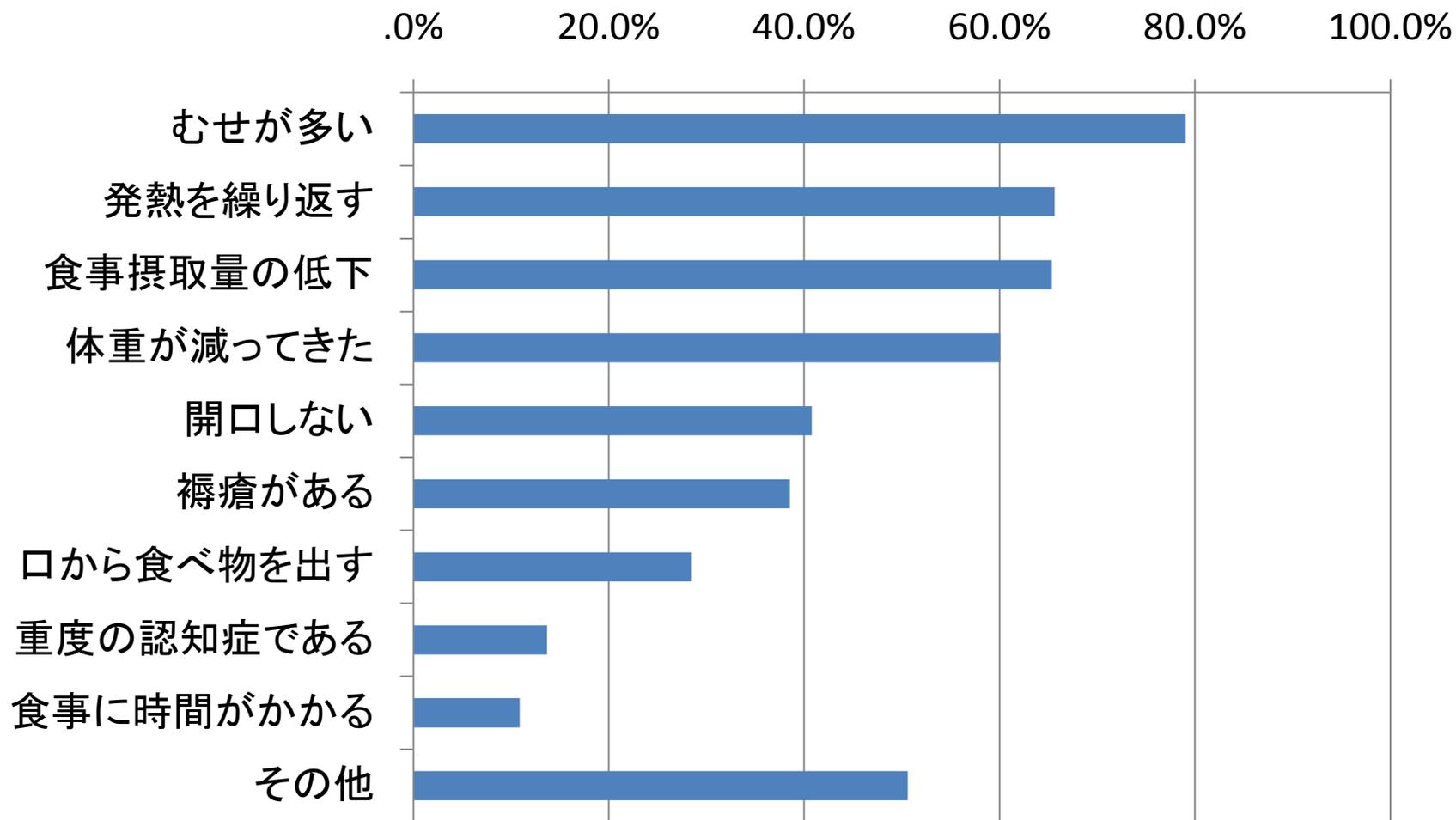
# ANHを導入後にANHを中止し、経口摂取も積極的に進めなかったケースの具体

- 家族から、今体調が落ち着いているので、このままにしてほしいと訴えがあった。何度も肺炎をくり返し、つらい姿を見るのはもう嫌だと
- 本人の苦痛表情を家族、関係者が見かねて抜去し、本人のあるがままの状態を見守ろうと話し合った。結果本人の表情は穏やかになり、家族も安心できた様子でした
- 経口摂取をやめてから、静脈栄養法を続けていたが、家族は経管栄養を選択できず、全身状態が徐々に悪化して、経口も経管も選べなかったケース。家族とはずっと話す機会を持っていたが、妻、長女、次女それぞれの思いがあり、どれにも決めかねて時間だけが経ってしまった
- 家族がこれまでの介護に疲弊され、今後の介護に希望を持つことができず、自然な形での終末(看取り)を希望された

# ANH導入についての意思決定に 家族として関わった経験

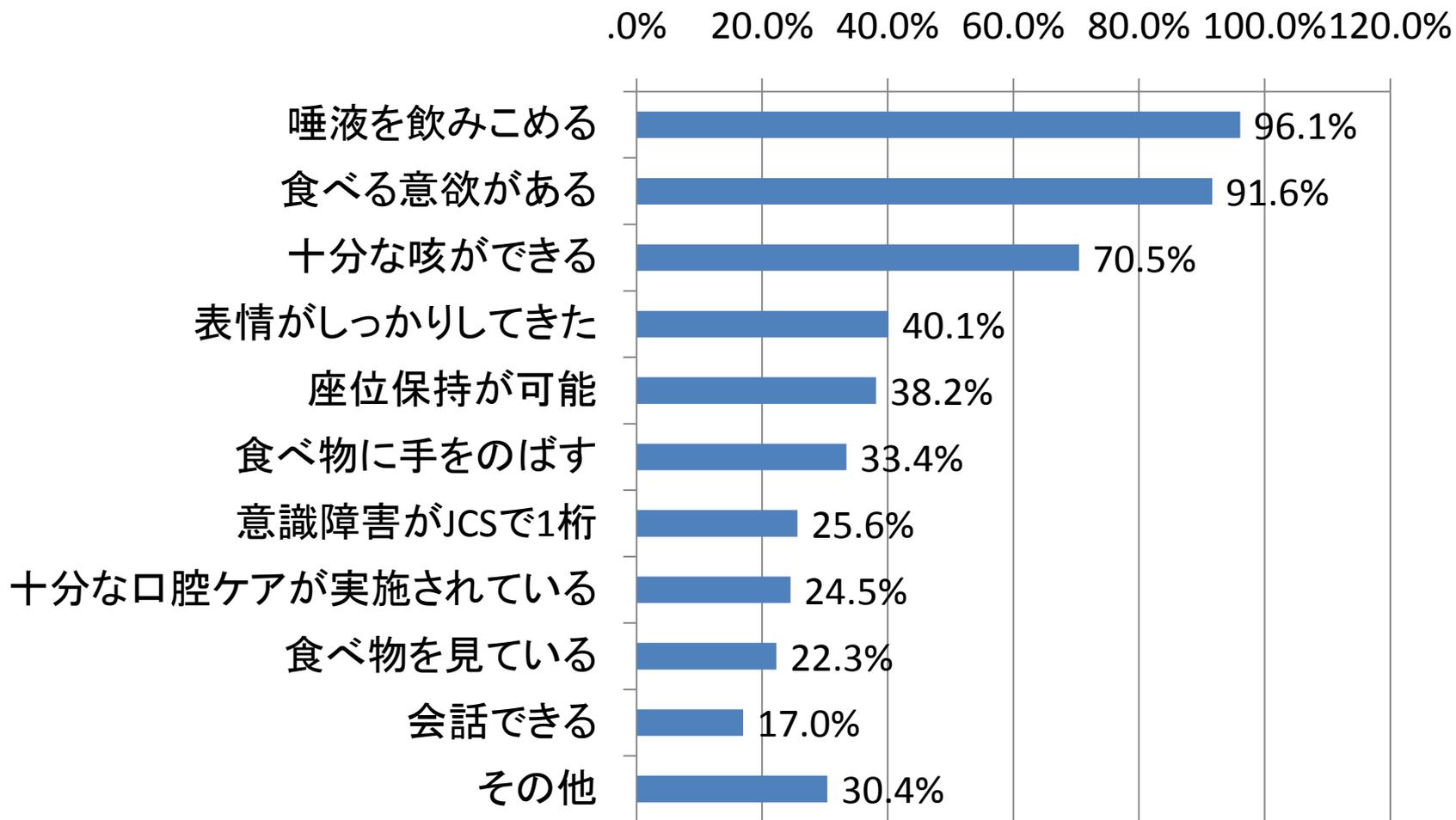


# 摂食困難となった認知症患者に対し、ANHの導入の可否を検討すべき要因



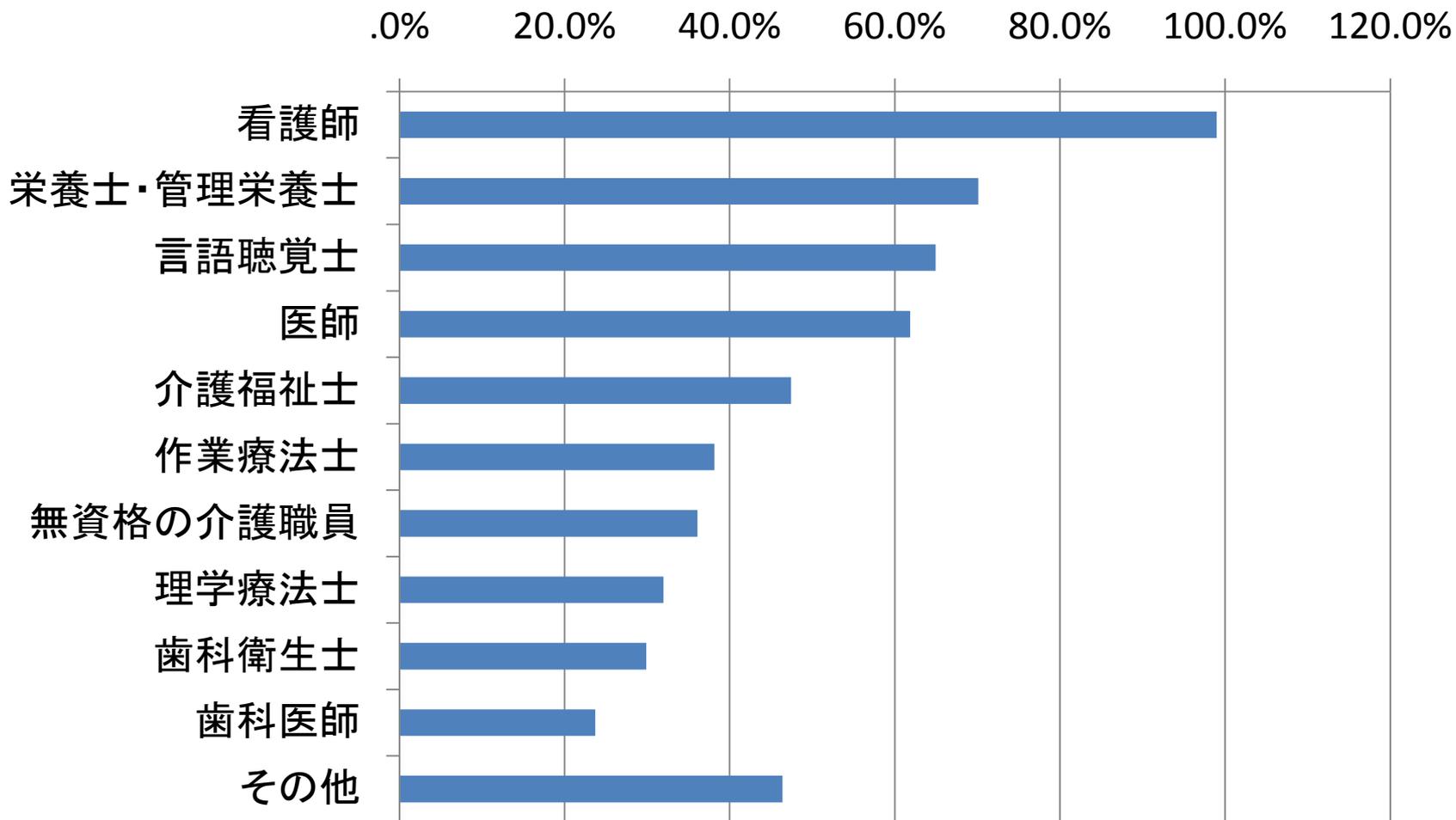
複数回答 N = 358

# 摂食困難となった認知症患者についてANHを導入した後、経口摂取再開を検討する要因



複数回答 N = 359

# 認知症患者への食事や口腔ケアにかかわるチームを構成する職種



病院の病棟などに勤務する対象者 複数回答 N = 97

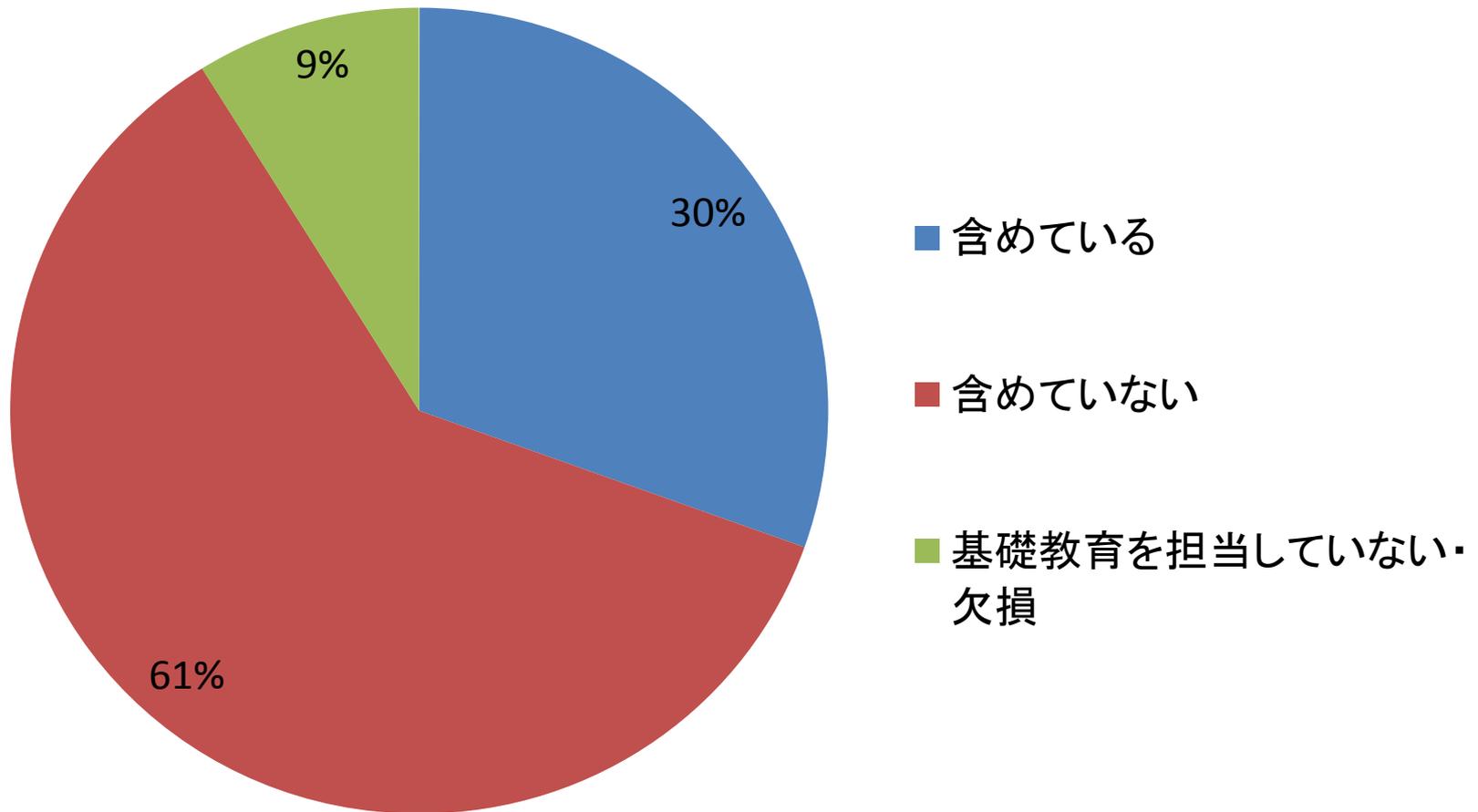
# チームでの認知症患者への食事の援助や口腔ケアに関する認識 困難なく実施できているケア トップ10

- 1 一人一人に合った食事の形態を決める(64.9%)
- 2 一人一人にあった食事の量を決める(52.6%)
- 3 食事の時、覚醒していることができるようにかかわる(50.5%)
- 4 一人一人に合った食事を用意するために他職種・他部門と話し合う(46.4%)
- 5 食事介助の時、職員がいすに腰掛ける(45.4%)
- 6 一人一人について嚥下しやすい姿勢を整える(43.3%)
- 7 保湿剤などを用いて、口腔内の保湿を行う(40.2%)
- 8 一人一人に合った口腔ケア方法を決める(35.1%)
- 9 決められた口腔ケア方法を確実に実施する(34.0%)
- 10 食べ物であることを理解できるようにかかわる(33.0%)

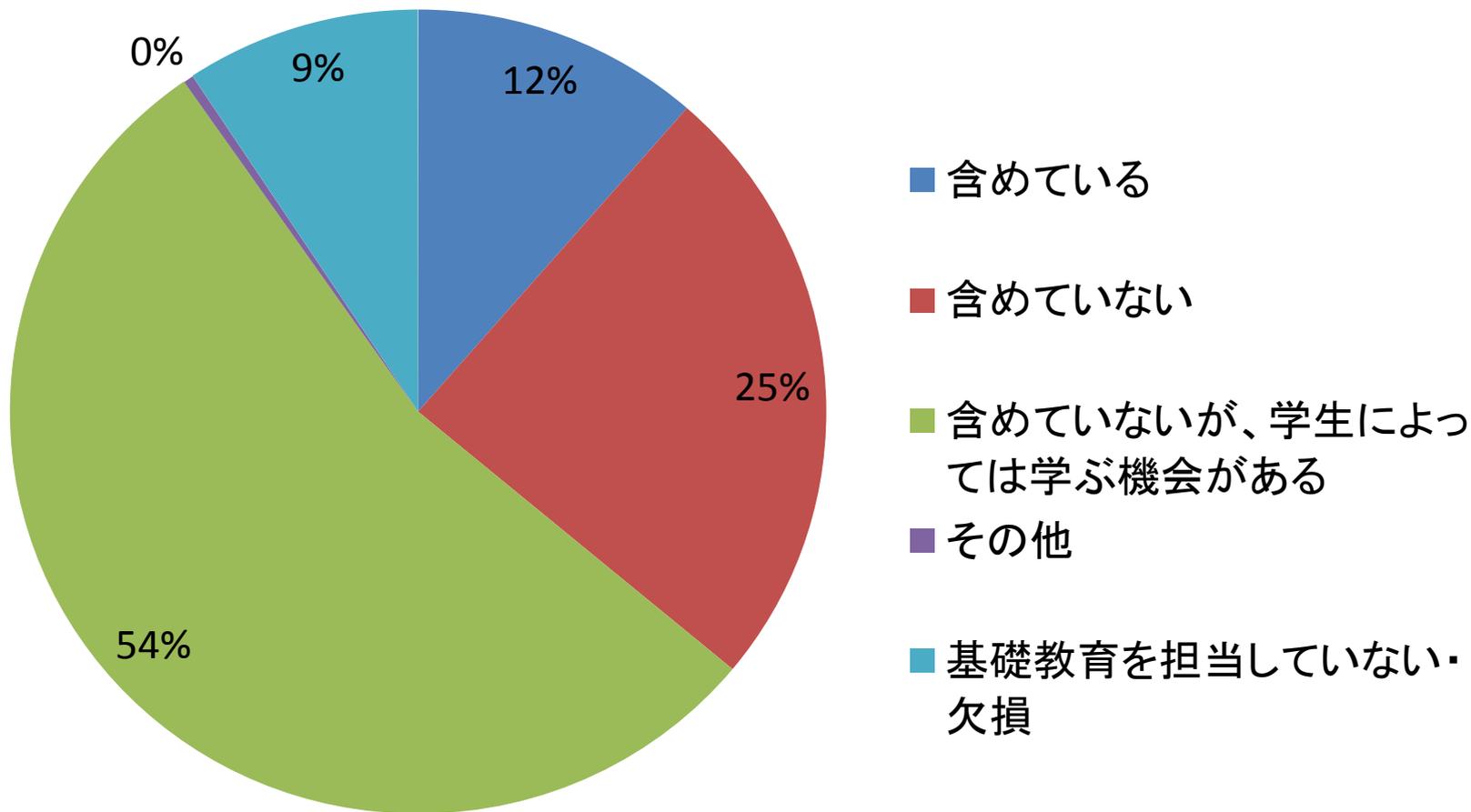
## チームでの認知症患者への食事の援助や口腔ケアに関する認識 あまり実施できていない ワースト7

- 1 唾液分泌量を低下させる作用がある薬の服用状況を確認する(60.8%)
- 2 食事の前には、空腹を感じられるようにかかわる(58.7%)
- 3 パーキンソン症候群が出現しやすい薬の服用状況を確認する(57.8%)
- 4 一人一人に合った食事時間を設定する(57.8%)
- 5 胃部不快感など消化器症状が出現しやすい薬の服用状況を確認する(51.6%)
- 6 う歯について確認する(50.5%)
- 7 認知症高齢者の好みの食べ物を提供する(48.4%)

# 講義・演習に認知症末期患者の ANH を学習内容に含めているか



# 実習に認知症末期患者の ANHを学習内容に含めているか



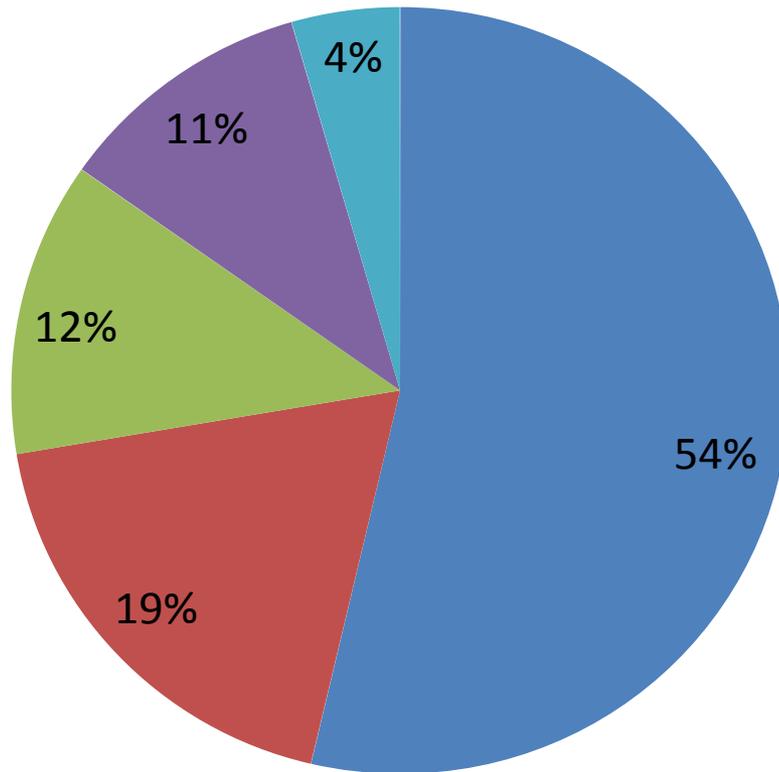
N = 236

# シナリオケース Aさん

Aさん(85歳女性)は療養病床に入院しているアルツハイマー型認知症患者です。Aさんの認知症は今では高度に進行し、意思疎通はできません。身体活動も著しく低下し、寝たきりで全介助です。笑うこともなくなってきました(FAST stageの7(e)の状態)。

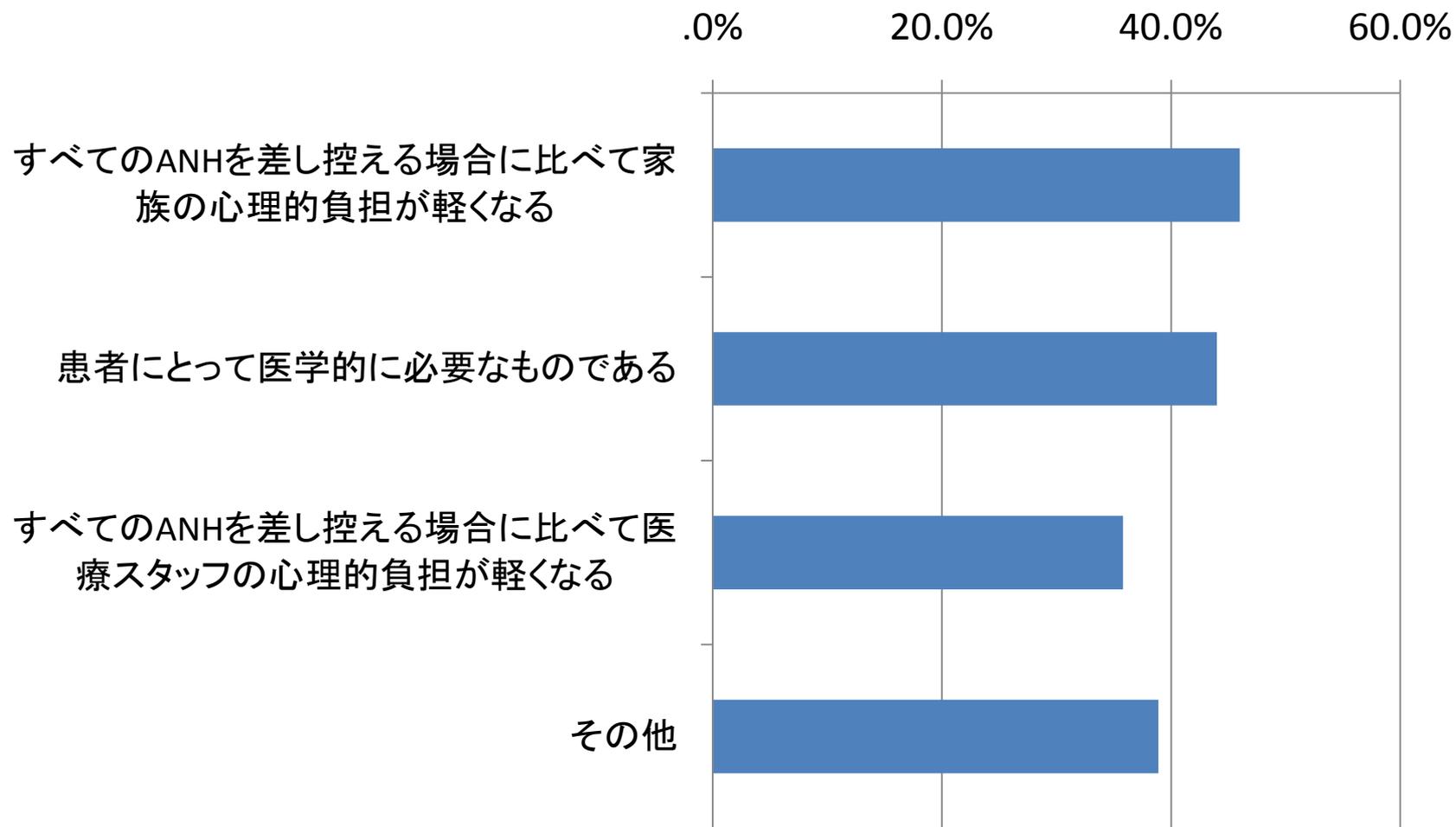
しばらく前から、摂食量が減少してきていましたが、言語聴覚士による嚥下リハビリや、ソフト食など食べやすい工夫と食事介助をして、なんとか限界まで経口で食事をとってきました。しかし、これまでも何回か誤嚥性肺炎を起こしており、先週も誤嚥性肺炎を起こしました。今回も肺炎は軽快したものの、経口摂取の再開は困難な状態であると、医療チームは判断しています。現在は、末梢点滴を行っていますが、栄養状態は徐々に悪化してきています。ANHに関するAさん自身の事前の意思表示はありません。夫は5年前に先立ちました。ほかの家族の意向も不明です。

# AさんにどのようなANHを施行するのが適切だとお考えになりますか



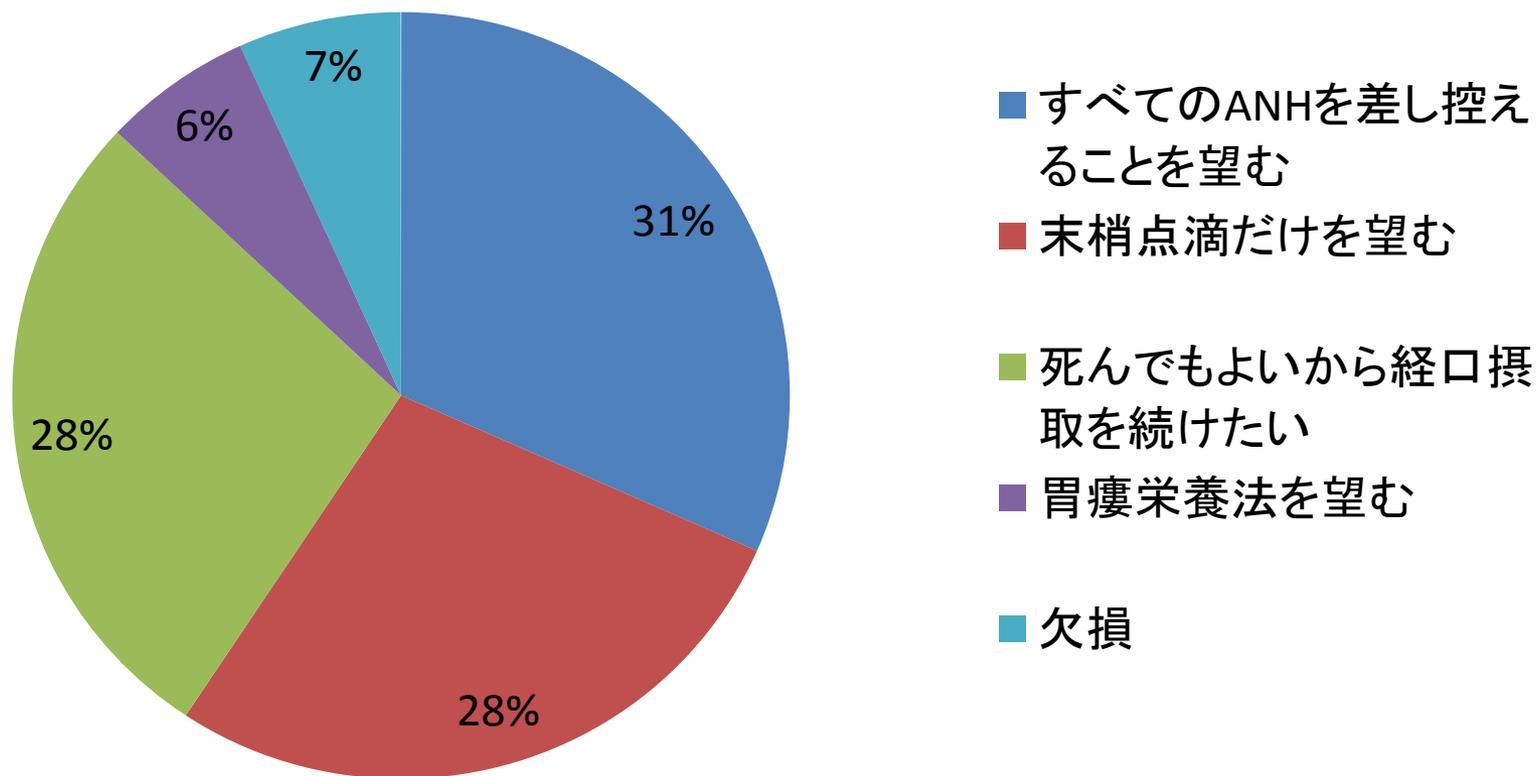
- 末梢点滴を継続し、その他のANHは施行せず、自然経過にゆだねるのが適切である
- すべてのANHを差し控えて自然経過にゆだねるのが適切である
- PEGを施行して胃瘻栄養法を導入するのが適切である
- 経鼻経管栄養法を施行するのが適切である
- 欠損

# Aさんに末梢点滴を行なうことの意味



複数回答 N = 95

# 自身がAさんの状態になった場合に、 以下のどれを望みますか



# 本調査から見えてきた今後の課題

- 本人の意向やエビデンスをふまえて、認知症末期患者と家族を看護する能力が看護職には今後よりいっそう求められる

⇒基礎教育と現任教育のさらなる充実を目指す

- 看護職は認知症高齢者がどのような経過をたどっているのかを理解し、今後どのような生活を送ることが本人にとって望ましいのかを本人、家族、多職種、多機関で話し合えるように調整することが求められる

⇒皆で悩むことが重要である。個々人が何に悩んでいるのか、何を重要視しているのかを共有することから、方向性を見出していくことができる

# 本調査から見えてきた今後の課題(つづき)

- チームで認知症患者への食事の援助や口腔ケアに確実に取り組むことが求められている

⇒多職種連携で安定して充実した生活を送ることと誤嚥、誤嚥性肺炎などの合併症の予防を目指せる

- ANH以外に、認知症末期患者の安楽や安心、信頼関係維持のために家族は何ができるのか、看護職は何ができるのかをあらためて考えることが求められる

⇒認知症末期患者の安楽、安心、信頼関係維持のために家族や看護職は何をしたことがあるのか、何をしたいと思っているのかを共有することから、次の行動が見いだすことができる

# 謝辞

- 本調査にご協力いただきました  
日本老年看護学会会員の皆様  
に感謝申し上げます。